

# 宰相チャーナキヤの格言詩

— *Cāṇakyanītidarpaṇa* 和訳 (1) —

堀 田 和 義

## はじめに<sup>(1)</sup>

本稿は、マウリヤ朝の創始者であるチャンドラグプタ（紀元前 4-3 世紀頃）の宰相チャーナキヤ（Cāṇakya）に帰せられる格言詩 *Cāṇakyanītidarpaṇa*（チャーナキヤが説く処世の鏡）の和訳である。インドの伝承によれば、チャーナキヤは『実利論』（*Arthasāstra*）の作者カウティリヤ（Kaṭilya, もしくは Kaṭalya）やヴィシュヌグプタ（Viṣṇugupta）と同一人物とされるが、この伝承は多くの研究者によって疑問視されている。また、*Cāṇakyanītidarpaṇa* 自体もチャーナキヤの実際の作品と考える必要はなく、術策に通じた政治家であったとされる彼の名に仮託された格言詩が口承で広がり、時代の経過とともに数を増し、それらが集められ、編纂されたものと考えられている。

このような格言詩は大量にあり、様々な詩集の形で伝承されてきたが、まずは Oscar Kressler がそれまでの研究を整理して 17 種類の recension に分類した。その後、Ludwik Sternbach の網羅的な研究によって、(1) the Vṛddha-Cāṇakya textus ornator (CV), (2) the Vṛddha-Cāṇakya textus simplior (Cv), (3) the Cāṇakya-nīti-śāstra (CN) with the subdivisions, (4) the Cāṇakya-sārasaṃgraha (CS), (5) the Laghu-Cāṇakya (CL), (6) the Cāṇakya-rāja-nīti-śāstra (CR) という 6 種類の基礎的テキストが再建され、*Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition (Cāṇakya-nīti-śākhā-sampradāyah)* vol.1, pt.1-2; vol.2, pt.1-3, Vishveshvaranand Indological Series no.27-29(b), Vishveshvaranand Vedic Research Institute, 1963-1970 として出版され

(3) たら。これら6種類のテキストは、共通する詩節があまりに少ないことや、その中には二大叙事詩『マハー・バーラタ』と『ラーマーヤナ』、『マヌ法典』、『パンチャ・タントラ』に見られるものも少なくないため、単一の本源に遡ることはほぼ不可能と考えられている。また、成立年代に関しても、不明な点が多いとされる。本稿が対象とするのは、これらのうちのCVである。

本作品は、アラビア・ペルシャ、チベット<sup>(4)</sup>、ネパール、モンゴル、満州、セイロン、ビルマ、タイ等々、インド以外の様々な地域にも伝播し、文化的な影響を与えた。また、ヨーロッパにおいても、ギリシアのインド学者 Galanos をはじめ、多くの研究者に注目されてきた。現代インドにおいては、書店のみならず、駅の売店などにもチャーナキヤ関連の書籍が並んでいる。例えば、現代インドのビジネス書の著者として最も売れている人物の一人と言われる Radhakrishnan Pillai にも、“*Inside Chanakya’s Mind*” や “*Chanakya in Daily Life*” “*Corporate Chanakya on Leadership*” “*Chanakya in You*” 等々、チャーナキヤを扱ったものが多く見られる。このことは、日本のビジネス書コーナーに『論語』を扱ったものが多く見られるのと比べることもできるだろう。

翻訳に際しては上記の Sternbach 本を底本とし、2種類のドイツ語訳 (Kressler 1907, Böhtlingk 1966) を参照した。Böhtlingk の読みは底本と異なることも多いが、ドイツ語訳だけでなく、当該詩節を含む他の文献の情報も挙げている点で非常に有益である。本稿では、Böhtlingk 1966 に対応詩節が見られる場合は、その番号を詩節末尾の括弧内に記した。

インドにおける出版物は、前述のような理由により、関連書籍も含めるとその数は膨大なものとなるため、そのすべてを把握することは困難であり、内容も玉石混濁であることが予想される。訳出に当たっては、入手したものの中から、比較的信頼できるとされる2種類のヒンディー語訳、およびヒンディー語注<sup>(5)</sup> (Caudhari 1999 と Kumāra 2016) を参考にしたが、これらが必ずしもインドの代表的な研究とは限らない点を断っておきたい。

CV の日本語訳はないが、同じくチャーナキヤに帰せられる *Nitiśataka* (Sternbach の区分で言うところの CN, 以下, CNS) の和訳としては辻 1982 があり、

仏教におけるニーティ文献に関しては、*Prajñāsataka* (PŚ), *Vinayakṣudrakavastu* の *Bharata* の教訓 (VKBh), *Śatagāthā* (ŚG) の和訳として、それぞれ岡田 1991, 1994, 1995 があるため、併せて参照されたい。<sup>(6)</sup> なお、本稿は、主として日本語でニーティ文献を読む人を想定しているため、以上の先行研究に見られる関連詩節の番号やページを注記した。また、神戸女子大学瀬戸短期大学名誉教授の岡田行弘先生のご厚意により、本稿の準備中に *Prajñādaṇḍa* (PD) の訳注の草稿を参照させていただくことができたため、その関連詩節の番号も挙げる事ができた (岡田草稿と表記)。岡田行弘先生、そしてご協力いただいた東京大学大学院の岡田文弘氏に感謝申し上げたい。

本稿は、東大寺勸学院における「インド思想史入門」の講義で使用した配布資料をもとにしている。全員のお名前を記すことはできないが、講義の際に貴重な助言をいただいた受講生の方々にも感謝申し上げます。

## 第 1 章

- 1・1 三界の統治者であり、力を備えたヴィシュヌ神に頭をもって敬礼し、様々な論書から引用して、『王政の集成 (*Rājanītisamuccaya*)』<sup>(7)</sup> を述べよう。
- 1・2 非常に優れた人は、本書を規定通りに学習すれば、法に関する教えにおいてよく知られている為すべきことと為すべきでないこと、善と悪とを知ることができる。
- 1・3 世の人々の幸せを求めて、それを知るだけで一切知者になることができるもの (= 『王政の集成』) を包括的に述べよう。
- 1・4 たとえ賢者であっても、愚かな弟子を教えること、身持ちの悪い妻を養うこと、敵意を持った人と付き合うことにより、落ち込んでしまう。(4911)
- 1・5 身持ちの悪い妻、人を欺く友人、口答えする召使い、蛇のいる家に住むこと。これらが死に等しいという点には疑いがない。<sup>(9)</sup> (2891)
- 1・6 困窮時のために財産を蓄えておくべきである。財産よりも妻を守るべきである。財産と妻よりも、たえず自己を守るべきである。<sup>(10)</sup> (958)
- 1・7 困窮時のために財産を蓄えておくべきである。財産のある者がどうして

- 困窮するののかというと、幸運〔の女神ラクシュミー〕は時に移り気であるため、蓄えていてもなくなってしまうからである。(959)
- 1・8 尊敬の念がなく、生活の糧もなく、親類縁者もなく、知識もまったく得られない地域は避けるべきである。(5352)<sup>(11)</sup>
- 1・9 資産家、ヴェーダに通暁したバラモン、王、河川、そして5番目に医師。これら5つが存在しないところには、一日たりとも滞在してはならない。<sup>(12)</sup>  
(3861)
- 1・10 生活の糧、<sup>(13)</sup>無畏、羞恥心、親切心、布施の習慣。これら5つが存在しないところに滞在してはならない。(3862)
- 1・11 仕事を命じる時に召使いを、不幸になった時に親族を、不運な時に友人を、<sup>(14)</sup>財産を失った時に妻を吟味すべきである。(2405)
- 1・12 病気の時、不幸になった時、飢饉の時、敵による危険が迫っている時、<sup>(15)</sup>王宮の門、墓場でも一緒にいてくれる者が本当の親族である。(1221)
- 1・13 確かなものを捨てて不確かなものを追い求めるならば、その者の確かなものも滅びてしまうし、その不確かなものは<sup>(16)</sup>そもそもすでに滅びている。  
(5600)
- 1・14 賢者は、たとえ美しくなくても良家の娘を娶るべきであり、卑しい家の美しい娘を娶ってはならない。結婚というのは等しい家柄の間であるもの  
である。(5982)
- 1・15 爪を持っている動物、河川、角を持っている動物、手に武器を持っ  
ている者を決して信用してはならない。女、王族も同様である。<sup>(17)</sup>  
(3214)
- 1・16 毒からでも甘露が得られ、不浄な物からでも黄金が得られる。卑しい  
者からでも至上の知識が得られ、卑しい家からでも宝石のような娘が得られ  
<sup>(18)</sup>  
る。(6227)
- 1・17 〔男と比べて〕女の食事は2倍、知性は4倍、大胆さは6倍、性欲は8  
倍と<sup>(19)</sup>言われている。(7204)

## 第2章

- 2・1 虚偽，性急，不実，愚かさ，度を越した貪欲，不浄，無慈悲。これらは女の本性から生じる欠陥である。(328)
- 2・2 食べ物と食べる能力，美しい妻と性的能力，財産と布施する能力〔という組み合わせ〕は，僅かな苦行の果報ではない。<sup>(20)</sup>(4640)
- 2・3 息子が従順であり，妻が望みに従い，自分の財産に満足しているならば，その者の天界はまさにここ（＝地上）にある。<sup>(21)</sup>(5382)
- 2・4 父親に愛情を抱く者が本当の息子であり，〔子供を〕養う者が本当の父親である。信頼できる者が本当の友人であり，幸福をもたらす者が本当の妻である。(2611)
- 2・5 見えないところで仕事を妨害し，目の前では好ましいことを言う。表面に乳をたたえた毒壺のような，そのような友人を避けるべきである。<sup>(22)</sup>(3979)
- 2・6 悪い友人を信用してはならない。友人であっても信用してはならない。時に，怒った友人は秘密をすべて暴露することがある。<sup>(23)</sup>(3430)
- 2・7 心の中で考えたことを決して言葉で表してはならない。秘密として守るべきであり，密かに結果へも結び付けるべきである。<sup>(24)</sup>(4687)
- 2・8 実に，愚かであることは苦痛であり，若さも苦痛である。他人の家に住むことは，苦痛の中でもさらに苦痛なことである。(1597)
- 2・9 どの山にでもルビーがあるわけではなく，どの象にでも真珠があるわけではない。どこにでも善き人がいるわけではなく，どの森にでも白檀があるわけではない。<sup>(25)</sup>(6523)
- 2・10 賢者は常に息子たちに様々な良い気質を身につけさせるべきである。処世術を知り，良い気質を身につけた者たちは，一族の中で敬われる。(4116)
- 2・11 子供を教育しないならば，母親は敵であり，父親も敵である。〔教育を受けていない子供は〕あたかもハンサ鳥の中にいる青鷺のように，社会の中で輝かない。<sup>(26)</sup>(4800)

- 2・12 甘やかすことにより多くの欠陥が生じ、打つことにより多くの美質が生じる。それゆえに、息子や弟子を打つべきであり、甘やかしてはならない。<sup>(27)</sup>  
(5847)
- 2・13 1詩節、またはその半分、4分の1、1音節〔を学ぶこと〕により、あるいは布施、学習、行為により、1日を有意義なものとするべきである。(6594)
- 2・14 妻との別離、親族からの軽蔑、負債の残り、邪悪な王に仕えること、貧困ゆえに顔を背けた友人。これら5つは火がなくても身を焦がす。<sup>(28)</sup>(1630)
- 2・15 川岸に生えている木々、他人の家にいる女、顧問官のいない王。これらは疑いなく速やかに滅びる。<sup>(29)</sup>(3290)
- 2・16 バラモンにとっては知識が力であり、クシャトリヤにとっては軍隊が力である。ヴァイシヤにとっては財産が力であり、シュードラにとっては年長であることが力である。(4388)
- 2・17 遊女は財産のなくなった男を捨てるべきであり、人民は敗れた王を捨てるべきである。鳥たちは果実のなくなった木を捨てるべきであり、客人は食事の後に家を捨てるべきである。(3761)
- 2・18 バラモンは報酬を受け取った後に祭主を捨てる。弟子は知識を手に入れた後に師を捨て、動物たちは燃えた森を捨てる。(2194)
- 2・19 行いが悪く、考え方も悪く、住む場所も悪い悪人を友とする者は、速やかに滅びる。
- 2・20 同等の者に対する友情、王に対する奉仕は輝いて見える。生業における商売、家における神々しい女も輝いて見える。(6847)

### 第3章

- 3・1 誰の一族に欠陥がないだろうか。誰が病気によって苦しめられないだろうか。誰が不幸にならないだろうか。誰に絶え間ない安楽があるだろうか。  
(1606)
- 3・2 行いは家柄を知らせ、言葉は出身地を知らせる。動揺は愛情を知らせ、身体は食物を知らせる。(870)

- 3・3 娘は優れた一族に結び付け、息子は知識に結び付けるべきである。敵は不幸に結び付け、友人は法に結び付けるべきである。(7058)
- 3・4 悪人と蛇とでは、悪人よりも蛇の方がましである。蛇は時に応じて咬みつくが、悪人は事あるごとに咬みつく。(2857)
- 3・5 次のような理由で、王たちは家柄の良い者たちを集める。すなわち、彼らは始めも、中間も、終わりも、王を見捨てることがないからである。(1447)
- 3・6 海は世界が帰滅する時に境界を越えるという。海は〔境界を〕越えようとするが、良き人々は帰滅の時でも〔矩を〕越えようとし<sup>(30)</sup>ない。(4270)
- 3・7 愚者は目に見える二本足の獣であり、避けるべきである。それはあたかも目に見えない棘のように、言葉という矢によって突き刺す<sup>(31)</sup>。(4924)
- 3・8 美貌と若さを備え、高貴な家柄に生まれた者でも、知識を欠いていたら輝いて見えない。あたかも、香りのないキンシュカ樹のように<sup>(32)</sup>。(5795)
- 3・9 コーキラ鳥にとっては鳴き声が美貌であり、女にとっては夫への貞節が美貌である。醜男にとっては知識が美貌であり、苦行者にとっては寛容が美貌<sup>(33)</sup>である。(1919)
- 3・10 一族のためには一人を犠牲にすべきであり、村のためには一族を犠牲にすべきである。国のためには村を犠牲にすべきであり、自己のためには大地を犠牲<sup>(34)</sup>にすべきである。(2627)
- 3・11 勤勉ならば貧困はなく、祈りを唱えていれば罪はない。沈黙していれば諍いはなく、注意していれば危険はない。(1250)
- 3・12 シーターは美しすぎたがゆえに、ラーヴァナは驕りすぎたがゆえに、バリは布施をしすぎたがゆえに〔苦境に陥った〕。いかなる場合でも「～しすぎ」を避けるべきである。<sup>(35)</sup>(149)
- 3・13 力のある者たちにとって何が重荷であろうか。精力的な者たちにとって何が遠くであろうか。知識ある者たちにとってどこが異国であろうか。好ましいことを語る者たちにとって誰が敵<sup>(36)</sup>であろうか。(1926)
- 3・14 一本であっても、花をつけた香り豊かな良木によって、その森全体が芳香で満たされる。あたかも、優れた息子によって一族全体が〔飾りたてら

れる] ように。<sup>(37)</sup> (1418)

- 3・15 火で焼かれている一本の枯れた木によって、その森全体が焼かれる。あたかも、悪い息子によって一族全体が〔滅ぼされる〕よう<sup>(38)</sup>に。(1412)
- 3・16 一人であっても、知識を備えた有徳な良い息子によって、一族全体が活気に満たされる。あたかも、月によって夜が活気に満たされるように。(1416)
- 3・17 悲しみや苦悩をもたらす息子がたくさん生まれたところで何になるのか。一族を支え、一族が安らぐことのできる一人息子の方がましである。(1746)
- 3・18 5年間は甘やかし、10年間は打つべきである。しかし、16歳になったら、息子を友人のように扱うべきである。<sup>(39)</sup> (5848)
- 3・19 災難、敵の軍隊、恐ろしい飢饉、悪人との接触に直面した際には、逃げる者が生き延びる。(1295)
- 3・20 法、<sup>ダルマ</sup>実利、性愛、解脱のうちのどれかひとつすらない者は、人間界に繰り返し生まれてただ死ぬだけである。(3120)
- 3・21 愚者が敬われることなく、穀物が十分に貯蔵され、夫婦の間に諍いが無い場所には、自ずと幸運〔の女神ラクシュミー〕がやって来る。(4917)

## 第4章

- 4・1 寿命、行い、財産、知識、死。これら5つは人が胎内にいる時に決定される。(992)
- 4・2 息子、友人、親族が良き人々から離れても、彼らとともに歩む者たちの善業により、一族は幸運になる。<sup>(40)</sup> (2686)
- 4・3 魚、亀、鳥の雌は、見ること、心を向けること、触れることで、常に子供を守る。良き人々との交際も同様である。(2716)
- 4・4 この身体が健康で、死が遠くにある間に、自分に有益なことをするべきである。臨終の時に何ができるだろうか。(5480)
- 4・5 知識は如意牛のような美質を備えている。というのも、時機を逸しても



- 実りをもたらしてくれるからである。異国においては、知識は母親のようなものであり、隠れた財産と言われている。(1651)
- 4・6 美質を欠いた100人の息子よりも、美質を備えた1人の息子の方が好ましい。一つの月は闇を滅ぼすことができるが、星は何千とあってもそれができない。<sup>(41)</sup>(5971)
- 4・7 長寿であっても愚かな者が生まれるよりは、生まれてすぐ死ぬ方がましである。彼の死がもたらすのは僅かな苦しみであるが、愚かな者は生きる限り身を焦がす。(4912)
- 4・8 悪い村での滞在、家柄の劣った者への奉仕、悪い食べ物、怒った顔の妻、愚かな息子、寡婦となった娘。これら6つは火がなくても身を焦がす。(1785)
- 4・9 乳も出さず、子も孕まない牝牛が何になろうか。賢明でなく、愛情もない息子の誕生が何になろうか。(1748)
- 4・10 輪廻の苦悩に身を焦がされた者たちには安らぎの原因が3つある。すなわち、息子、妻、良き人々との交際である。(6637)
- 4・11 王たちは一度だけ命令する。賢者たちは一度だけ述べる。少女は一度だけ〔嫁として〕与えられる。これら3つはそれぞれ一度だけである。<sup>(42)</sup>(6650)
- 4・12 苦行は1人で、読誦は2人で、歌唱は3人で、旅行は4人で、田畑〔の耕作〕は5人で、戦闘は多くの者で〔行われる〕。(1392)
- 4・13 清浄かつ活発な者が本当の妻であり、夫に貞節を尽くす者が本当の妻である。夫に愛される者が本当の妻であり、真実を語る者が本当の妻である。(7008)
- 4・14 息子のいない人の家は空虚であり、親類のいない土地は空虚である。患者の心は空虚であり、<sup>(43)</sup>貧困はあらゆる点で空虚である。(444)
- 4・15 反復しなければ学問は毒であり、消化しなければ食物は毒である。貧者にとって人付き合いは毒であり、<sup>(44)</sup>年老いた者にとって若い女は毒である。(2836)
- 4・16 憐れみを欠いた法を<sup>ダルマ</sup>放棄すべきであり、知識を欠いた師を放棄すべきである。怒った顔の妻を放棄すべきであり、愛情のない友人を放棄すべきで

ある。(2629)

4・17 長旅は人間を老化させ、束縛は馬を老化させる。欲求不満は女を老化させ、日光は衣を老化させる。<sup>(45)</sup>(237)

4・18 時間とはどのようなものか。友人とはどのようなものか。場所とはどのようなものか。獲得と損失とはどのようなものか。私は何者か。私にはどのような力があるのか。以上のことを何度も繰り返し考慮すべきである。  
(1502)

4・19 実父、入門儀礼を施す者、知識を授ける者、食べ物を与える者、恐怖から守る者。これら5つが父親であると言われている。<sup>(46)</sup>(2328)

4・20 王の妻、師の妻、友人の妻、妻の母親、自分の母親。これら5つが母親であると言われている。<sup>(47)</sup>(5743)

4・21 バラモンたちにとっての神は火であり、聖者たちにとっての神は心の中にいる。愚かな者たちにとっての神は偶像であり、[一切を]等しく見る者たちにとっての神はあらゆる場所にいる。(66)

## 第5章

5・1 火はバラモンにとって敬うべきものであり、バラモンは〔他の〕<sup>ヴァルナ</sup>種姓にとって敬うべきものである。夫こそは妻たちにとって敬うべきものであり、<sup>(48)</sup>客人は万人にとって敬うべきものである。(2172)

5・2 黄金は、擦ること、切ること、熱すること、打つことという4つによって吟味される。同様に人間も、喜捨、気質、美質、行為という4つによって吟味される。(5104)

5・3 危険がまだ来ていない間は恐れるべきである。しかし危険がやって来るのを目にしたならば、恐れることなく戦うべきである。<sup>(49)</sup>(2550)

5・4 同じ腹から生まれ、同じ星のもとに生まれても、気質は同じにならない。あたかも、ナツメの実と棘のように。(1423)

5・5 無欲な者が公職に就くことはなく、恋をしていない者が装飾を好むこともない。不器用な者が好ましいことを語ることはなく、はっきりと物を言う

- 者がペテン師であることもない。(3786)
- 5・6 愚者にとっては賢者が憎しみの対象であり、貧者にとっては金持ちが憎しみの対象である。良家の女にとっては遊女が憎しみの対象であり、美女にとっては醜女が憎しみの対象である。(4915)
- 5・7 知識は怠惰によって損なわれ、他人の手に渡った女も損なわれる。種がほとんどない耕地は損なわれ、指揮官のいない軍隊も損なわれる。(1031)
- 5・8 復習によって知識が保たれ、良い気質によって一族が保たれる。美質によって友人が保たれ、目によって怒りが保たれる。(513)
- 5・9 <sup>ダルマ</sup>法は財産によって守られ、知識は精神集中によって守られる。王は穏やかさによって守られ、家は淑女によって守られる。(6074)
- 5・10 ヴェーダに関する学識を非難し、教典と正しい行いに異を唱え、心鎮まった人を攻撃する口の悪い人々は無駄に苦しむ。
- 5・11 布施は貧しさを減ぼし、良い気質は不幸を減ぼす。知恵は無知を減ぼし、信仰は恐怖を減ぼす。(2775)
- 5・12 欲望に匹敵する病はなく、迷妄に匹敵する敵はない。怒りに匹敵する火はなく、知識に勝る喜びはない。(3670)
- 5・13 生まれる時も死ぬ時も1人であり、善悪〔の果報〕を享受する時も1人である。地獄に墮ちる時も1人であり、最高の境遇へ赴く時も1人である。(2335)
- 5・14 ブラフマンを知る者にとっての天界は取るに足りないものであり、勇敢な者にとっての命も取るに足りないものである。感官を克服した者にとっての女は取るに足りないものであり、欲望のない者にとっての世界も取るに足りないものである。(2587)
- 5・15 異国の旅において知識は友であり、家において妻は友である。病気の者にとって薬草は友であり、死んだ者にとって<sup>ダルマ</sup>法は友である。(6092)
- 5・16 海に降る雨は無意味であり、満足した者にとっての食事も無意味である。裕福な者に対する布施は無意味であり、日中の灯火も無意味である。(6259)
- 5・17 雲〔の水〕に匹敵する水はなく、自己〔の力〕に匹敵する力もない。

- 眼〔の光〕に匹敵する光はなく、穀物に匹敵する好ましいものもない。(3676)
- 5・18 貧者たちは財産を求め、四足獣たちは言葉を求める。人間たちは天界を求め、神々は解脱を求める。(211)
- 5・19 大地は真実によって保たれ、太陽は真実によって輝き、風は真実によって吹く。すべてのものは真実に立脚している。(6741)
- 5・20 幸運〔の女神ラクシュミー〕は移ろいやすく、氣息や生命、若さも移ろいやすい。実に、移ろいやすい浮世においては、ただ法<sup>ダルマ</sup>だけが揺るがない。(2269)
- 5・21 人間の中で狡猾なのは床屋であり、鳥たちの中で狡猾なのはカラスである。四足獣の中で狡猾なのはジャッカルであり、女たちの中で狡猾なのは花輪売りである。(3400)

## 第6章

- 6・1 学ぶことにより法<sup>ダルマ</sup>を識別し、学ぶことにより悪しき考えを捨てる。学ぶことにより知識を獲得し、学ぶことにより解脱を獲得することができる。(6573)
- 6・2 鳥たちの中ではカラスがチャンドーラであり、獣たちの中では犬がチャンドーラである。聖者たちの中では怒っている者がチャンドーラであり、あらゆるチャンドーラによって非難されている。(3850)
- 6・3 真鍮は灰によって清められ、銅は酸によって清められる。女は月経によって清められ、河川は流れによって清められる。(4567)
- 6・4 王は歩き回ると敬われ、バラモンも歩き回ると敬われる。ヨーガ行者も歩き回ると敬われるが、女が歩き回ると破滅<sup>(52)</sup>する。(4641)
- 6・5 意志は運命の通りに生じる。決意も同様であり、同伴者もまったく同様である。(2532)
- 6・6 時間は生き物を成熟させ、時間は生類を奪い去り、時間は〔他の者が〕眠っている時に目覚めている。実に、時間は逃れがたいものである。(1688)
- 6・7 先天盲の者は物を見ることができず、性愛に目が眩んだ者も物を見るこ

とができない。驕りに酔い痴れている者も物を見ることができず、利益を求める者は欠点を見ることができない。(3336)

6・8 自己は自らが行為をなし、自らがそれ (= 行為) の果報を享受する。自らが輪廻を彷徨い、自らがそれ (= 輪廻) から解脱する。(7305)

6・9 王は王国でなされた悪業を〔享受し〕、宮廷祭官は王の悪業を〔享受する〕。夫は妻がなした悪業を〔享受し〕、師は弟子の悪業を〔享受する〕。(5769)

6・10 負債を作る父親は敵であり、身持ちの悪い母親も敵である。美しい妻は敵であり、愚かな息子も敵である。<sup>(53)</sup>(1330)

6・11 貪欲な者は財産により掌握すべきであり、傲慢な者は両手を合わせるにより掌握すべきである。愚者は意に従うことにより掌握すべきであり、賢者はありのままを語るることによって掌握すべきである。<sup>(54)</sup>(5860)

6・12 悪い王の王国よりは、王国がない方がましであり、悪い友人を友人とするよりは、友人がいない方がましである。悪い弟子を弟子とするよりは、弟子がいない方がましであり、悪い妻を妻とするよりは、妻がいない方がましである。(5963)

6・13 悪い王の王国によって、どうして人民の幸せがあらうか。悪い友人を友人とすることによって、どうして安楽があらうか。悪い妻を妻とすることによって、どうして家に喜びがあらうか。悪い弟子を教えている者に、どうして名誉があらうか。<sup>(55)</sup>(1809)

6・14 ライオンと鷲からは1つのことを学ぶべきであり、雄鶏からは4つのことを学ぶべきである。カラスからは5つのことを学ぶべきであり、犬からは6つ、驢馬からは3つのことを学ぶべきである。<sup>(56)</sup>(7041)

6・15 人が仕事を成し遂げようと望むときは、多くのことであれ、僅かなことであれ、全力でそれを行うべきである。〔これが〕ライオンから〔学ぶべき〕1つのことと言われる。<sup>(57)</sup>(4261)

6・16 賢明な人は、鷲のように感官を制御し、場所、時間、〔自分の〕力を知って、すべての仕事を成就させるべきである。<sup>(58)</sup>(6950)

- 6・17 〔朝早く〕起きること、戦い、親族に分け与えること、自ら出歩いて食事を摂ることという4つを雄鶏から学ぶべきである。<sup>(59)</sup> (5510)
- 6・18 隠れて性交すること、大胆であること、いつも適切な時に集めること、不注意でないこと、信用しないことという5つをカラスから学ぶべきである。<sup>(60)</sup> (2183)
- 6・19 よく食べるが、非常に少なくとも満足し、よく眠るが、速やかに意識が戻り、主人に忠実で、勇敢である。これら6つが犬から〔学ぶべき〕美質である。<sup>(61)</sup> (4427)
- 6・20 非常に疲れていても荷を担い、寒さも暑さも気に留めず、常に満足して行動する。〔これら〕3つを驢馬から学ぶべきである。<sup>(62)</sup> (694)
- 6・21 これら20種の美質を備えた人は、<sup>(63)</sup>いかなる仕事や状態においても打ち負かされることがないであろう。

## 第7章

- 7・1 財産の損失、心痛、家庭内の不和、〔自らが被った〕虚偽と軽蔑。賢者はこれらを表に出すべきでない。<sup>(64)</sup> (583)
- 7・2 財産と穀物の取り引き、知識の獲得、食事、商売。これらにおいて恥じらいを捨てた者は幸せになることができる。<sup>(65)</sup> (3042)
- 7・3 満足という甘露に満たされ、心鎮まった者たちの楽は、財産に貪欲であちこちを駆け回っている者たちにはない。(6800)
- 7・4 自分の妻、食べ物、財産という3つのものには満足すべきである。しかし、学習、苦行、布施という3つのものに満足してはならない。(6799)
- 7・5 2人のバラモン、バラモンと火、夫婦、主人と召使い、シヴァ神と雄牛の間を通してはならない。(6160)
- 7・6 火、師、バラモンに足で触れてはならない。牝牛、少女、老人、子供も同様である。(4038)
- 7・7 車とは5腕尺、馬とは10腕尺、象とは100腕尺の距離をとり、悪人の場合はその場を離れるべきである。<sup>(66)</sup> (6341)

- 7・8 象は鍵棒を手にした者によって打たれ、馬は手によって打たれる。角を持っている動物は棍棒を手にした者によって打たれ、悪人は剣を手にした者によって打たれる。(7379)
- 7・9 バラモンは食物を喜び、孔雀は雨雲の轟を喜ぶ。善き人は他者の幸運を喜び、悪人は他者の不幸を喜ぶ。(2586)
- 7・10 力のある者には友好的に〔接すべきであり〕、悪人には反抗的に〔接すべきである〕。自分と力の等しい敵には恭しく、あるいは力づくで〔接すべきである〕。(324)
- 7・11 王にとっては腕力が力であり、バラモンにとってはヴェーダの知識が力である。女たちにとっては美貌、若さ、優美さが無上の力である。(4457)
- 7・12 あまりに真っ直ぐになってはならない。森へ行って、見るがよい。そこでは真っ直ぐなものは切られ、曲がった木が残っている。(3564)
- 7・13 ハンサ鳥は水のあるところに住み、まったく同様に、干上がると去って行く。人は捨てたり頼ったりするハンサ鳥のようにになってはならない。(5085)
- 7・14 獲得した財産を布施することこそが〔正しい〕保存方法である。あたかも、貯水池の中にある水を排出することのように。(1307)
- 7・15 財産のある者には友人がおり、財産のある者には親族がいる。世においては財産のある者が真の人間であり、財産のある者が真に生きている。(5409)
- 7・16 この生者の世界において、かつて天界にいた者の身体には4つの印がある。すなわち、布施を好むこと、甘い言葉、神々の崇拜、バラモンを満足させることである。(7315)
- 7・17 かつて地獄にいた者たちの身体にある印は、激しい怒り、辛辣な言葉、貧困、親族に対する敵意、卑しい者との交際、家柄が劣る者への奉仕である。(166)
- 7・18 獣たちの王(=ライオン)の住処に行けば、象の頬にある真珠が得られる。しかし、雌のジャッカルの住処へ行っても、子供の尻尾、驢馬の皮の切

れ端しか得られない。(2087)

- 7・19 知識がなければ、人生は無意味である。あたかも、秘部を守ることも、蛇を防ぐこともできない犬の尻尾のように。(6487)
- 7・20 言葉と心の清浄さ、感官の抑制という清浄さ、万物に対する憐れみという清浄さ。これらは最高のものを求める者たちの清浄さである。(6024)
- 7・21 花には香り、ゴマには油がある。木片には火、牛乳にはギーがあり、砂糖黍には糖蜜がある。同様に、識別力によって、身体の中にあるアトマンを見なさい。(4154)

## 第 8 章

- 8・1 最低の者は財産を求め、中程度の者は財産と名誉を求め、最高の者は名誉を求める。なぜならば、名誉は偉大な者たちにとっての財産だからである。(216)
- 8・2 砂糖黍、水、牛乳、根、キンマ、果実、薬草を摂った後でも、沐浴や布施などという行為を実行すべきである。(1086)
- 8・3 灯火が闇を喰らって油煙を生み出す〔ように、〕いつも食べる食べ物に見合った子供が生まれる。(2816)
- 8・4 賢者よ、美質を備えた者たちに財産を与えるべきであり、そうでない者たちには決して与えてはならない。見よ、海の水は、雲の口に達するといつも甘みを帯びており、地上では植物と動物を含む一切の生き物を生かし、同じそれが 100 万倍になるとその海へ帰って行く。(6071)
- 8・5 たった 1 人のヤヴァナ (=ギリシア人) は 1,000 人のチャーндアーラに等しいと、真実を目の当たりにした賢者により言われている。ヤヴァナよりも卑しい者はいない。(2273)
- 8・6 身体への塗油、火葬用の薪の煙〔との接触、〕性交、剃髪後に沐浴を行わない限り、〔人は〕チャーндアーラである。(2615)
- 8・7 〔食物が〕消化されていなければ水は薬であり、消化されていれば水は力をもたらす。食事の水は甘露であるが、食後は毒をもたらす。(104)



- 8・8 実践を伴わない知識は無意味であり、知識のない人間も無意味である。<sup>(68)</sup>  
指揮官のいない軍隊は無意味であり、夫のいない女も無意味である。(7361)
- 8・9 年老いた時の妻の死、親族の手にある財産、他人に依存している食物。  
これら3つのものは人間にとって不名誉なものである。(6260)
- 8・10 アグニホートラ祭なくしてヴェーダはなく、布施なくして祭式はなく、  
信心なくして成就是不。それゆえに、信心こそが根本原因である。(3548)
- 8・11 木片、石、金属でできた〔尊像〕を、信心を込め、信仰をもって崇拝  
すれば、成就に至り、ヴィシュヌはその者に満足する。(1714)
- 8・12 木片の中に神はなく、石にも、土でできた物にもいない。実に、神は  
信心の中にある。それゆえに、信心こそが根本原因である。(3197)
- 8・13 寂靜に等しい苦行はなく、満足以上の楽はない。渴望以上の病はなく、  
憐れみ以上の<sup>ダルマ</sup>法はない。(6439)
- 8・14 怒りはヤマ王であり、渴望はヴァイタラニー川である。知識は如意牛  
であり、満足はナンダナの森である。(1974)
- 8・15 美質は美貌を装飾し、良い気質は家柄を装飾する。成就是不知識を装飾  
し、享受は財産を装飾する。(2167)
- 8・16 美質のない者の美貌は無意味であり、悪い気質の者の家柄も無意味で  
ある。成就に達していない者の知識は無意味であり、享受されない財産も無  
意味である。(3754)
- 8・17 大地にある水は清浄であり、<sup>(69)</sup>貞節な妻も清浄である。安寧をもたらす  
王は清浄であり、満足しているバラモンも清浄である。(6481)
- 8・18 満足していないバラモンは無意味であり、満足している王も無意味で  
ある。恥じらいのある遊女は無意味であり、恥じらいのない良家の娘も無意  
味である。<sup>(70)</sup>(755)
- 8・19 知識を欠いていたら、人間にとって高名な家柄が何になろうか。たと  
え家柄が悪くても、賢者は神々によっても<sup>(71)</sup>敬われる。(1734)
- 8・20 世において賢者は賞賛され、あらゆる場所で敬われる。知識によって  
すべてが得られ、知識はあらゆる場所で敬われる。(6116)

- 8・21 肉食する者、酒飲み、愚者、文盲といった人間の姿をした獣によって、大地は重荷を課されている。(4778)
- 8・22 食べ物を欠いていれば王国を焼き、マントラを欠いていればリトヴィジュ祭官を焼き、布施を欠いていれば祭主を焼く。祭式に匹敵する敵はない。(362)

(未完)

### 【参考文献】

ヴァンテルニッツ (中野義照訳)

[1966] 『インドの純文学—インド文献史第5巻』, 日本印度学会。

岡田 行弘

[1991] 「知恵百頌 (*Prajñāśataka*) —古代インドの処世訓」, 『神戸女子大学瀬戸短期大学学術紀要』第2巻, pp.1-16。

[1993] 「『根本有部律雜事』のニーティ—Bharataの教訓」, 『印度学仏教学研究』第42巻第1号, pp.45-51。

[1994] 「Bharataの教訓—藏漢テキストおよび和訳」, 『神戸女子大学瀬戸短期大学学術紀要』第5巻, pp.13-28。

[1995] 「ヴァラルチ作『百頌』(*Śatagāthā*) 和訳」, 『神戸女子大学瀬戸短期大学学術紀要』第6巻, pp.1-14。

上村 勝彦

[1998] 『インド詩集 夢幻の愛』, 春秋社。

辻 直四郎

[1966] Review: Ludwik Sternbach, *Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition*, Volume One (in two parts): *Six Versions of Cāṇakya's Collections of Maxims, reconstructed and critically edited, for the first time, with introductions and variants from original manuscripts, all available printed editions and other materials* (=Vishveshvaranand Indological Series, 27 and 28). Hoshiarpur, 1964. CCVII, 392 pp.; CXXIX, 274 pp., *Indo-Iranian Journal* vol.IX-No.4, pp.301-307.

[1973] 『サンスクリット文学史』, 岩波書店。

[1982] 「チャーナクヤ・シャタカ」, 『辻直四郎著作集第三巻 文学』, pp.368-379, 法蔵館。

村上 昌孝

[1999] *Cāṇakya* 伝説と *Mudrārākṣasa*, 『インド思想史研究』 11, pp.42-64。

Böhtlingk, Otto

[1966] *Indische Sprüche: Sanskrit und Deutsch*, Otto Zeller Verlangsbuchhandlung, Osnabrück. (reprint)

Caudharī, Guṇjeśvara

[1999] *Cāṇakyanītidarpaṇaḥ (Rājanītisamuccayaḥ) hindīvyākhyā-viśeṣavaktavyādivihūṣitaḥ*, Caukhambā Surabhārātī Granthamālā no.248, Caukhambā Surabhārātī Prakāśana, Vārāṇasī.

Kressler, Oscar

[1907] *Stimmen indischer Lebensklugheit*, Otto Harrassowitz, Leipzig.

Kumāra, Ajaya

[2016] *Cāṇakya Nīti*, Prakhara Prakāśana, Delhi.

Sternbach, Ludwik

[1963] *Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition* vol.1, pt.1, Vishveshvaranand Indological Series no.27, Vishveshvaranand Vedic Research Institute, Hoshiarpur.

[1964] *Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition* vol.1, pt.2, Vishveshvaranand Indological Series no.28, Vishveshvaranand Vedic Research Institute, Hoshiarpur.

[1967] *Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition* vol.2, pt.2, Vishveshvaranand Indological Series no.29(a), Vishveshvaranand Institute, Hoshiarpur.

[1968] *Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition* vol.2, pt.3, Vishveshvaranand Indological Series no.29(b), Vishveshvaranand Institute, Hoshiarpur.

[1970] *Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition* vol.2, pt.1, Vishveshvaranand Indological Series no.29, Vishveshvaranand Institute, Hoshiarpur.

[1974] *Subhāṣita, Gnostic and Didactic Literature, A History of Indian Literature* vol.IV, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

(本稿は平成 29 年度科学研究費 16K16699 による研究成果の一部である)

## 註

- (1) 以下の *Cāṇakyanītidarpaṇa* に関する説明は、主として、Sternbach の一連の研究や辻 1966, 1973 等の記述に基づくものである。
- (2) この点に関しては、村上 1999 を参照。村上 1999 では、Hermann Jacobi らの先行研究をまとめたうえで、ヴィシャーカダッタ (Viśākhadatta) の戯曲 *Mudrārākṣasa*

がインドの伝承の成立に与えた影響を詳しく論じている。

- (3) Sternbach の研究の概要は、辻 1966 に簡潔にまとめられている。
- (4) チベット大蔵経の修身部には、仏教文献の中でも独立したニーティ論書として 8 つのテキストが挙げられており、その中には *Cāṅakyanītidarpaṇa* も含まれている（北京版の番号は 5826）。チベット語訳されているのは、Sternbach の分類で言うところの CR である。チベット大蔵経に含まれる 8 つのテキスト、およびそれぞれに関する先行研究については、岡田 1993 を参照。
- (5) この本には、以下のような英語版がある。*Cāṅakyanītidarpaṇaḥ*, B. S. Bist, (The Vrajajivan Indological Studies no.5), Delhi, 2001.
- (6) 同じくタイトルに *nīti* という言葉が入っている有名な作品として、バルトリハリの『ニーティ・シャタカ』があるが、いわゆるニーティ文献とは多少趣を異にする。バルトリハリの『ニーティ・シャタカ』の日本語訳としては、上村 1998 がある。
- (7) 本書は一般に『チャーナキヤが説く処世の鏡』(*Cāṅakyanītidarpaṇa*) として知られるが、テキスト中にはその名が見られない。ここでは、この詩節の「王政の集成 (*rājanītisamuccaya*)」という語を本書の書名として訳出したが、この語は一般名詞である可能性も考えられる。また、「王政 (*rājanīti*)」とあるが、本書を読めば分かるように、その内容は必ずしも王政に限られるものではなく、処世の知恵や世俗の道徳などの様々なものを含んでいる。
- (8) *yathā śāstram* を *yathāśāstram* とつなげて読む。
- (9) CNS 43 (辻 1982, p.373).
- (10) CNS 29 (辻 1982, p.372).
- (11) CNS 37 (辻 1982, p.373).
- (12) CNS 36 (辻 1982, p.372).
- (13) *lokayātrā bhayaṃ* を Böhtlingk のように *lokayātrābhayaṃ* (*lokayātrā+abhayaṃ*) とつなげて読む。
- (14) CNS 21 (辻 1982, p.371).
- (15) CNS 17 (辻 1982, p.371), PD 56 (岡田草稿, p.18).
- (16) CNS 63 (辻 1982, p.375).
- (17) CNS 27 (辻 1982, p.372).
- (18) CNS 16 (辻 1982, p.370).
- (19) CNS 78 (辻 1982, p.376), PD 182 (岡田草稿, p.56).
- (20) CNS 52 (辻 1982, p.374).
- (21) CNS 42 (辻 1982, p.373).
- (22) CNS 18 (辻 1982, p.371).
- (23) CNS 20 (辻 1982, p.371).
- (24) CNS 38 (辻 1982, p.373).
- (25) CNS 55 (辻 1982, p.374), PD 148 (岡田草稿, p.44), ŚG 80 (岡田 1995, p.11).
- (26) CNS 9 (辻 1982, p.370).
- (27) CNS 12 (辻 1982, p.370).

- (28) PD 58 (岡田草稿, p.18), ŚG 65 (岡田 1995, p.10).
- (29) CNS 94 (辻 1982, p.377).
- (30) PD 260 (岡田草稿, p.78).
- (31) PD 240 (岡田草稿, p.72).
- (32) CNS 7 (辻 1982, p.370). キンシュカ樹は赤い, 美しい花をつけるが, 香りがな  
いことで知られる。
- (33) CNS 46 (辻 1982, p.373), PD 162 (岡田草稿, p.48), ŚG 82 (岡田 1995, p.12).
- (34) CNS 31 (辻 1982, p.372), VKBh 36 (岡田 1994, p.24). また, この詩節につい  
ては, 岡田 1993, pp.48-49 でも論じられている。
- (35) CNS 50 (辻 1982, p.374).
- (36) CNS 73 (辻 1982, p.376), PD 232 (岡田草稿, p.70).
- (37) CNS 13 (辻 1982, p.370).
- (38) CNS 14 (辻 1982, p.370).
- (39) CNS 11 (辻 1982, p.370).
- (40) 難解。tad dharmāt を taddharmāt とつなげて読む。
- (41) CNS 10 (辻 1982, p.370).
- (42) VKBh 11 (岡田 1994, p.18), ŚG 71 (岡田 1995, p.11)
- (43) CNS 47 (辻 1982, p.373).
- (44) CNS 98 (辻 1982, p.378).
- (45) CNS 41 (辻 1982, p.373).
- (46) PD 237 (岡田草稿, p.72), ŚG 67 (岡田 1995, p.10).
- (47) PD 238 (岡田草稿, p.72).
- (48) CNS 49 (辻 1982, p.374).
- (49) PD 89 (岡田草稿, p.26).
- (50) VKBh 23 (岡田 1994, p.21).
- (51) VKBh 29 (岡田 1994, p.22), ŚG 60 (岡田 1995, p.10)
- (52) 王, バラモン, ヨーガ行者, 女を主語とする 4つの文の動詞はいずれも「歩き回  
る」を意味する(語根は√ bhram-)が, それぞれのニュアンスが異なる。王の場  
合は国内を巡察すること, バラモンやヨーガ行者の場合は遍歴遊行することを意味  
するが, 女の場合は「目的もなくふらふらする」といったネガティブな意味となる。  
この点については, *Manusmṛti* 9.13 等を参照。
- (53) CNS 45 (辻 1982, p.373).
- (54) CNS 33 (辻 1982, p.372).
- (55) CNS 95 (辻 1982, p.376).
- (56) CNS 66 (辻 1982, p.375).
- (57) CNS 67 (辻 1982, p.375), PD 73 (岡田草稿, p.22).
- (58) CNS 68 (辻 1982, p.375).
- (59) CNS 72 (辻 1982, p.376).
- (60) CNS 71 (辻 1982, p.376).

- (61) CNS 69 (辻 1982, p.375).
- (62) CNS 70 (辻 1982, p.375).
- (63) ライオンから 1 種, 鷲から 1 種, 雄鶏から 4 種, カラスから 5 種, 犬から 6 種, 驢馬から 3 種を合計した数を指す ( $1+1+4+5+6+3=20$ )。6・14 を参照。
- (64) CNS 34 (辻 1982, p.372), ŚG 76 (岡田 1995, p.11).
- (65) CNS 35 (辻 1982, p.372).
- (66) CNS 28 (辻 1982, p.372).
- (67) 直訳は「ヴェーダの知識を備えたバラモンには力がある」となる。
- (68) pāda b の直訳は「人間は無知によって無意味となる」。
- (69) Böhrtlingk 1966, 辻 1966 に従い, pāda a の śucir bhūmigataṃ を śuci bhūmigataṃ と訂正して読む。
- (70) CNS 80 (辻 1982, p.376).
- (71) CNS 6 (辻 1982, p.370).